

SY2-4

地域での取り組みについて—子の気持ち晴れて、親のところに虹かかる—

石谷 暢男

石谷小児科医院

小児科クリニックでは、各種予防接種の普及により感染症の症例は減少し、学校不適応を起こすなど心に問題を抱えた子どもたちの受診が増加している。不登校の症例も、発達障害が併存している症例が多くなった。さらに、ストレスの多い社会環境と価値観や時間的・経済的余裕のなさからくるストレス耐性やレジリアンスの低下により、家族構成が複雑化したり、不適切な養育が背景となって、愛着障害を伴った発達障害の子どもの不登校など、対応が難しい症例も珍しくない。

近年は各学校にスクールカウンセラーが配置され、当院を受診する軽症の不登校や心の相談は減少している。増加しているのは、中等症以上の不登校、摂食障害などの食行動異常、希死念慮やリストカット・アームカットなどの自傷行為、性的逸脱行動、若年妊娠、反抗挑戦性障害、非行を含む素行障害、飲酒・喫煙・覚醒剤や危険ドラッグなどの薬物乱用と依存の問題、メディア活用の知識やルール習得の不足と保護者の危険意識の低さによるライン (LINE) やソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) などを使った生命にかかわるようないじめや暴力、リベンジポルノなどの人権侵害の問題とネットトラブル、ケイタイ・コンピューター端末によるネット依存など様々な依存症、うつ病・うつ状態などの気分障害や不安障害、そして統合失調症の前駆期と鑑別困難な二次障害を伴った発達障害の思春期の子どもたちの受診である。

平成元年の開業以来、当院では子どもたちとその家族のよろず相談所として、様々な子ども達やその家族と一緒に悩み、解決法を模索してきた。子どもやその家族を支援していく中で、受容・共感・累加性・適時性・ストレス耐性・発達課題・成長欲求・変身願望・節目・世代間伝達・個体差・固体内差・登校刺激・自他区分・モチベーション (動機付け)・セルフエスティーム (自尊感情)・自己存在感・ストレスマネジメント・認知変容・行動変容・オブジェクトロス (対象喪失)・モーニングワーク (喪の仕事) などの視点を持って対応することは重要で、不登校の場合も同様であると考えた。不登校の対応に関しても、教育・療育・福祉・保健・医療などの関係諸機関を含めた社会資源との多職種連携や、内科や精神科への移行を視野に入れ、将来を見据えた質の高い支援を心がけてきた。本日は、不登校の子どもたちと家族と教師を支える地域での取り組みと、今後の連携の在り方について言及する。